利尻礼文サロベツ国立公園のすがた

最北の原野・サロベツ

上空より望むサロベツ原野

日本に残る貴重な大湿原

サロベツ原野は、かつては南北 27km、東西 8km、面積 14,600ha に及び、北海道の湿原としては、石狩泥炭地と釧路湿原に次ぐ広さであったが、1960 年代中期以降開発が進み、現在の約 6,700ha にまで縮小した。しかし、釧路湿原や尾瀬国立公園の尾瀬ヶ原とともに、日本に残る代表的な湿原であり、低地における高層湿原としては日本最大の広さを持つ。

広大なサロベツ原野

湿原の生物たち

サロベツ原野と海岸の砂丘林一帯には、エゾシカやトウキョウトガリネズミをはじめ、ツメナガセキレイ、ノビタキ、ベニマシコなど多くの鳥獣類が生息する。これまで日本では道東だけに生息していたタンチョウも、平成 16（2004）年以降サロベツで営巣している。そのほかオジロワシ、チュウヒなどの希少猛禽類、爬虫類では国内では北海道北部だけに分布しているコモチカナヘビも見られる。

1

2

3

1 タンチョウ
2 シマアオジ
3 オジロワシ
4 ベニマシコ
5 ノゴマ
6 コモチカナヘビ

4

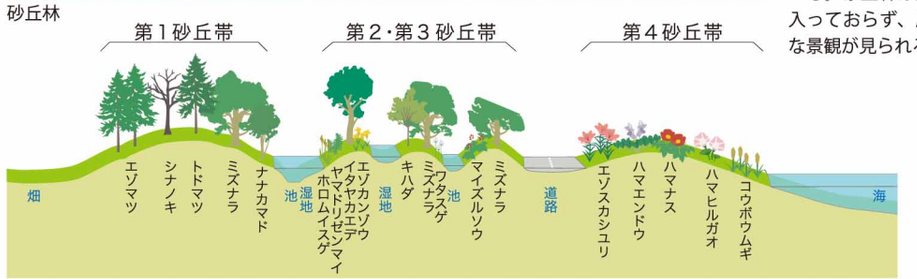
5

6

砂丘林

残存する海岸生態系

公園内の海岸には数列の砂丘が海岸線と平行に並んでいる。自然海岸のまま残存する部分が多く、海から陸へとのつながる植生の分布がよく残っている。海岸にはハマナスやハマニンニクなどの海浜植物があり、海岸に面した砂丘には、強風のため枝がすべて陸側を向き、刈りこまれたように揃って低いミズナラ林がある。その内側の砂丘にはトドマツを主とし、エゾイタヤなどを交えた林があり、内陸に行くほど樹高が高くなる。砂丘間の低地には池沼や湿原があり、湿性植物が生育している。砂丘林は全体としてほとんど人の手が入っておらず、原生的な雰囲気の濃い、特異な景観が見られる。



砂丘林の断面図

Column

湿原開発の歴史と自然再生の取り組み

寒冷な気候のサロベツ原野は、農業利用には適さないと考えられていた。北海道開拓が本格的に始まった19世紀後半から20世紀前半まで、一部で泥炭の採掘などが行われたが、農用地の開発は湿原を囲む乾燥した丘陵地におおむね限られていた。

第2次大戦終了後、引揚げ者などを対象にした入植が行われ、昭和30年代後半に入ると、大規模な総合開発事業が行われて、サロベツ放水路なども完成した。

しかし、このころから、それまで無用の土地とされていた湿原の価値が見直されて保存の気運が高まり、昭和49（1974）年にその主要部が国立公園に編入され、平成15（2003）年に拡張された。

これまでの開発事業により、排水路の開削による湿原の乾燥化とササの侵入や、湖沼への土砂の流入による環境変化などの影響が見られるため、泥炭採掘跡地の湿原再生、湿原の水位低下防止などを目的とする自然再生への取り組みが始まっている。

湿原の水位低下防止のための堰

上空から見た泥炭採掘跡地